

強者の戦略

2025 年度 京大世界史 第 1 問〔問題編〕

今回は 2025 年度の京大の第 1 問を解説したいと思います。京大の第 1 問は中国史やイスラーム史を中心にアジア史の出題が中心ですが、2025 年度はイスラーム史でした。イスラーム史は多くの受験生が苦手分野としますので、ぜひチャレンジしてみてください。

I 世界史探究問題

オスマン帝国は、バルカン半島や地中海などでヨーロッパの諸勢力と戦いながら、その勢力圏を拡張していった。2 度のウィーン包囲とその帰結に必ず言及しながら、15 世紀中頃から 17 世紀末に至る、オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争と、それによるオスマン帝国の支配領域の変化を 300 字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。

2025 年度 京大世界史 第 1 問〔解答解説編〕

【解答】

オスマン帝国は 1453 年にビザンツ帝国を滅ぼし、同世紀にバルカン半島の全域を支配した。16 世紀にはハンガリー軍を破り、ハンガリーを支配した。さらにハプスブルク帝国の首都ウィーンを攻撃する第 1 次ウィーン包囲を行ったが失敗した。しかし、プレヴェザの海戦ではスペインなどキリスト教国の連合艦隊を破り、地中海の制海権を握った。また 16 世紀後半のレパントの海戦ではスペインやヴェネツィアなどに敗れたが、地中海の制海権は維持した。17 世紀末にオーストリア帝国の都を包囲する第 2 次ウィーン包囲を行うが、オーストリア・ポーランドに敗北した後、カルロヴィッツ条約によりハンガリー・トランシルヴァニアを失う事となった。(299 字)

強者の戦略

【解説】

【論題】

15 世紀中頃から 17 世紀末に至る、オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争と、それによるオスマン帝国の支配領域の変化

【条件】

2 度のウィーン包囲とその帰結に必ず言及する

まず論題で注意して欲しい点が 2 点。

●15 世紀中頃から 17 世紀末に至るとは？

「中頃」とはその世紀の 40 年代から 60 年代にかけて、「末」とはその世紀の 80 年代以降を指すのが一般的。つまり、

○始点 1440 年代～60 年代 ○終点 1680 年以降～1700 年 となる。

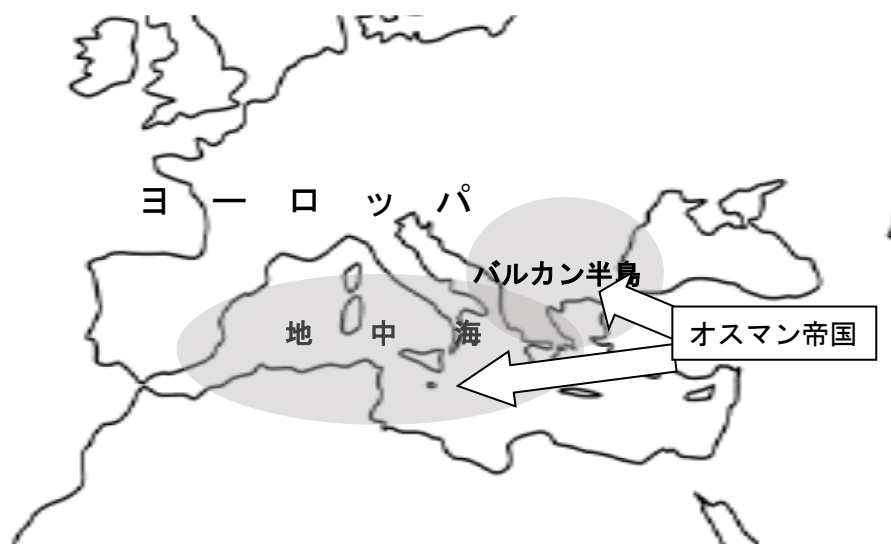
●オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争と、それによるオスマン帝国の支配領域の変化とは？

〈原因〉オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争

〈結果〉オスマン帝国の支配領域の変化

これらの因果関係が分かる論述を心がけたい。

さらに注意したいのが、問題文にある「オスマン帝国は、バルカン半島や地中海などでヨーロッパの諸勢力と戦いながら、その勢力圏を拡張していった。」という部分。



「ヨーロッパの諸勢力と戦いながら」とあるため、オスマン帝国の勢力圏の拡大としてマムルーク朝を滅亡させたセリム 1 世の記述は除外すること。

また、【条件】2 度のウィーン包囲とその帰結に必ず言及する。

こちらは「オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争」で必ず組み込むことに注意。

強者の戦略

では、○始点 1440 年代～60 年代 ○終点 1680 年以降～1700 年 と
 〈原因〉オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争
 〈結果〉オスマン帝国の支配領域の変化
 この 2 点に注意して論題をみていきましょう。

オスマン帝国の発展	
メフメト 2 世	第 7 代スルタン (位 1444, 1451～81)
・1453 年コンスタンティノープルを攻略 → ビザンツ帝国滅亡 イスタンブルと改称し、帝国の首都とする。 ・セルビア・ボスニア・ヘルツェゴヴィナ・ワラキアを完全に支配下におき、かつてのビザンツ帝国の全領域を治める。 ・イスタンブルにトプカプ宮殿を建設。	
セリム 1 世	第 9 代スルタン (位 1512～20)
・1514 年 サファヴィー朝を破り (チャルディランの戦い)、シリア・メソポタミアを占領。 ・1517 年 マムルーク朝を滅ぼし、エジプトを支配する。 → マムルーク朝の保護下にあったカイロのアップパース家カリフがその地位を奪われ、スルタンがカリフを兼ねることになる (スルタン＝カリフ制)。 ※世俗権力者であるオスマン帝国のスルタンが、宗教権威者であるカリフから禅譲をうけたといわれている。しかし禅譲の記述自体が同時代の史料にはなく、その考え方はヨーロッパ列強の進出に対して、衰退していく帝国でのスルタンの影響力を強めるために後に主張されたものとされる。	
スレイマン 1 世	第 10 代 (位 1520～66) 帝国の最盛期
○領土の拡大 ・フランス (フランソワ 1 世) と同盟し、神聖ローマ皇帝カール 5 世と戦う。 → 1536 年、フランス商人に、領内での居住と通商の自由を公に認める特権 (カピチュレーション) を与える。 ※現在の研究では、スレイマン 1 世の息子であるセリム 2 世が 1569 年に公認したものを最初とされている。 ・1526 年 モハーチの戦いでハンガリー (ラヨシュ 2 世) を破る。 ・1529 年 第 1 次ウィーン包囲 → ヨーロッパ諸国に大きな衝撃を与える。 ・1538 年 プレヴェザの海戦でスペイン・ヴェネツィア・ジェノヴァ・ローマ教皇の連合艦隊を破る。以後、クレタ島・マルタ島を除いた全地中海を制圧した。しかし、ハプスブルク家との抗争は続く。 ・イスタンブルにスレイマン＝モスクを建立 (建築家シナン)	



スレイマン 1 世

こちらは研伸館の世界史のテキスト『体系化する世界史』より抜粋したのですが、
 ○始点である 1440 年代～60 年代は「メフメト 2 世による 1453 年のコンスタンティノープル攻略」となります。

オスマン帝国の衰退	
○内的要因	
・スレイマン 1 世以後、無能なスルタンが相次ぐ。 ・後宮 (ハレム) の勢力が大きくなり、政治に干渉するようになる ・イエニチェリ軍団は拡大・横暴化し政治への介入を行う	◆徴税請負制 17 世紀以降、ティマール制に代わり普及した徴税制度。徴税業務を請け負った地方有力者 (アーヤーン) が台頭した。
○外的要因	
・レバントの海戦 (1571 年) でスペイン海軍に敗北。しかし依然勢力は衰えず。 ・第 2 次ウィーン包囲の失敗 (1683 年) → ヨーロッパ諸国の反撃 1 世紀半の間に西欧では社会体制の変化、軍事組織の改革が起こって、西欧とイスラームの力関係は逆転していた。 ・カルロヴィッツ条約 (1699 年) オーストリア (レオポルド 1 世) ・ロシア (ピョートル 1 世) ・ポーランド・ヴェネツィアとの講和条約。 ハンガリーをオーストリアに割譲し、ヨーロッパの領土の約半分を失う。→ オーストリアの東欧での覇権確立	

また、同じくこちら研伸館の世界史のテキスト『体系化する世界史』より抜粋したのですが、
 ○終点である 1680 年以降～1700 年は「1699 年 カルロヴィッツ条約の締結」となります。

強者の戦略

では、[条件]である2度のウィーン包囲とその帰結に必ず言及した上で、【論題】の「15世紀中頃から17世紀末に至る、オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争と、それによるオスマン帝国の支配領域の変化」を解説していきましょう。まず構想メモです。

●構想メモ

＜オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争＞	＜オスマン帝国の支配領域の変化＞
1453 年 メフメト2世によってビザンツ帝国が滅亡	→ アナトリア半島に加えて バルカン半島全域を支配
1526 年 スレイマン1世によるモハーチの戦いで ハンガリー軍を破る	→ バルカン半島を北上し、 ハンガリーを領土に加える
1529 年 同皇帝によってはハプスブルク帝国の都である ウィーンを攻撃する第1次ウィーン包囲が 行われる → 冬の寒冷化によって撤退し、失敗	
1538 年 同皇帝によるプレヴェザの海戦でスペイン・ ヴェネツィア・ローマ教皇などの連合艦隊を破る	→ 地中海の制海権を握る
1571 年 レパントの海戦でスペイン・ヴェネツィア・ローマ 教皇などの連合艦隊に敗北	→ キプロス島の占領やチュニジア併合 で地中海の制海権を維持
1683 年 オーストリア帝国の都を包囲する第2次ウィーン 包囲を行うが、オーストリア・ポーランドに敗北し、 撤退	
1699 年 オーストリア・ポーランド・ヴェネツィアとの間で カルロヴィッツ条約を結ぶ	→ オーストリアにハンガリー・トランシル ヴァニアを割譲し、バルカン半島の 領土の一部を失う

強者の戦略

構想メモは【論題】の15世紀中頃から17世紀末に至る＜オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争＞を左に、＜オスマン帝国の支配領域の変化＞を右にメモ書きしています。

また、論述するに当たって、

変化を問う問題の場合、変化の前と、変化の後、そしてその原因を考える。

という点が重要となります。＜オスマン帝国の支配領域の変化＞について、その変化の前と後で支配領域がどのように変化したかをしっかり分かるように書くことに気を付けてください。また、その原因は、構想メモの矢印が表すように＜オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争＞となります。

さらに【論題】である＜オスマン帝国とヨーロッパの諸勢力との抗争＞が分かるように、“どのヨーロッパの諸勢力との抗争であったか”を書くべきだと思われます。解答例を参考に論述してみてください。